電子メディア 対 従来型辞書

投野由紀夫 Tono Yukio

■ 従来型の辞書は生き残れるのか?

電子メディアと従来型つまり紙媒体の辞書を対比して論じる際に、その根底にある問いは「従来型の辞書は生き残れるのか?」であろう。この問いに自信を持ってイエスと答えるのは難しい状況になってきている。「紙」は全般に劣勢だ。たとえば現在、週刊マンガ雑誌の売上部数は軒並み激減している。みな、マンガを買わなくなったのである。マンガを読まなくなったのかというと、そうではない。インターネットでこっそり見ているのである。携帯サイトの小説が人気爆発して、書籍になったりする逆転現象が起こっている。辞書の世界も同様である。現在、高校での辞書一括購入はどんどん電子辞書のシェアが増えている。英語だけでなく国語辞典も古語辞典も社会の歴史年表もみな1台で足りてしまうからだ。最近はゲーム機で単語学習ができる。それも並の単語帳より数段よくできている。5年後にはゲーム機は自学自習マシンになっているかもしれない。

この小論では、このような激変する21世紀に従来型の辞書に変わるどのような潮流があるのか、その主要な動向を概観するとともに、最初の問い「従来型の辞書は生き残れるのか?」に応えるためのいくつかのポイントを考察してみたい。

■ 最大の強敵——Web 2.0

従来型の辞典の生き残りの最大の脅威になっているのは、私見では携帯版の電子辞書ではない。携帯版の電子辞書はいわば、紙の辞書を中に入れているので、ある意味で「相思相愛」の関係といえる。問題はそこではない。大変な状況になっているのは実はインターネット、web である。「Web 2.0」という言葉を耳にされたことがあるだろうか? これは1つの社会現象として捉えられるべき用語なのだ。簡単に言うとインターネットの世界も世代交代が進んでおり、従来型の誰かが作った静的な情報を web で閲覧している時代は終わり、コミュニティで情報交換をしたりページ上で動的に情報を共有するような形の web ページの形態が一般化している、ということである。ブログがそうだし、いわゆる SNS (social networking service) といわれるもの全体がそうなのだ。この web 2.0 の1つの象徴が Wikipedia なのである。

■ Wikipedia の衝撃

Wikipedia は Jimmy Wales (一般には Jimbo Wales という愛称の方が知られている) によって2001年に始まった。その経緯については Don Tapscott & Anthony D. Williams (2006) *Wikinomics* (日経BP社から翻訳が出ている) の第3章を読むことをお勧めする。彼は最初、Nupedia という web の百科事典プロジェクトを手がけており、こちらも誰でも記事を書くことができたのだが、学者や専門家に報酬を払って7ステップのレビューを行い、承認された記事だけがアップされるという、中央集権、トップダウン方式だった。これで1年間12万ドルをかけて公開された記事はたったの24本。その時点で Wales は Nupedia を放棄し、誰でも自由に記事を書き換えられる Wiki で百科事典を作ろうと思い立った。そしてスタートした最初の1カ月で200, 1年間で18,000もの項目が公開された。2008年1月現在、Wikipedia は世界253言語、全言語総計で600万もの記事が公開されている。

たしかに Wikipedia の内容に関してケチをつける人はたくさんいる。項目の精度や偏りに問題はあろう。しかし、Wikipedia は我々に新しい「モノづくり」の形を示している。

■ ピア・プロダクションと辞書

Wikipedia は従来の百科事典の作り方を根底から変えてしまった。辞書学では比較的今でも辞書編纂者 (compiler) vs. ユーザー (user) という対立概念が根強い。しかし、Wikipedia にはそれがない。彼らの新しい概念はピア・プロダクション (peer production) である。誰でも編纂者になれる。ユーザー同士がコラボレーションをすれば、長期的に内容が改善される、という理念に基づいている。たしかに「荒らし」もいるだろう。しか

し、Wikipedia ではわいせつ文書の挿入は2分以内に誰かが削除するという統計がある。Wiki は性善説に基づいている。「無料で全人類の英知にアクセスできる世界」という考えに共感した多くの人で成立しているのだそうだ。

私は現在 Wiktionary といって wiki 版の辞書作成プロジェクトの動向を観察している。百科事典と違って、ことばの辞書は難しいようである。つまり、百科事典は事実をある程度客観的に描写すればそれで済むのだが、ことばの分析はそうはいかないからだ。よりメタ言語的な抽象度の高い記述ができないといけない。しかし、そういう洞察のあるプロが Wiktionary に加わっていけば、「大化け」する可能性があると感じている。

何よりも面白いのは、現在、辞書学の特にユーザー研究の領域では、「編纂者」対「ユーザー」という構図に、辞書をメタ的に探求する「研究者(researcher)」とユーザーを直接教えている「教師(teacher)」という軸も加えて議論しているのだが、「wiki 的辞書づくり」ではこういう対立軸は必要なく、それらを吸収してしまっている点だ。それぞれがお互いの持っている視点でどんどんアイデアを出し合って発展していくような辞書の可能性がそこにはある。こういった共同作業は、おそらく従来型の辞書の「中身」を画期的に変える可能性がある。この4者が自由に交流できる辞書づくりの場は、現状の出版社主導の紙媒体の辞書編集ではきわめて難しいであろう。

■ 変容する辞書の「器」

Wikipedia から少し視点を広げよう。辞書学には megastructure という用語がある。これは辞書を入れる全体の「器」に関する用語である。現在ほどこの megastructure が劇的に進化している時代は他にない。たとえば、紙の辞書から変容して、海外の英英辞典はほとんどが CD-ROM ソフトを添付している。それらの多くはパソコン上でインターネットや文書作成の作業とシームレスに辞書検索ができるような工夫をいろいろ施している。また1冊の辞書だけでなく、ロングマンの『アクティベーター』のような類義語や活用辞典などをセットにして、アイデアを言葉にする作業をサポートするような「ツール・キット」としても利用価値が高いプロダクツも多くなってきた。

そして、日本の電子辞書である。世界的にもその進化の度合いは瞠目に値するものがある。そのボリューム、内容の充実度で今や一時代を画したと言えよう。自分の望む辞書コンテンツをメディアで入れ替えられる自由度の高さ、見出し語や例文の音声読み上げ、シャープのフルカラー電子辞書に代表される高輝度・高精細な表示画面を見ると、もはや紙である必要はきわめて少ないと思えてくる。そして、Nintendo DS で辞書ソフトが出て、大人がどんどんゲーム機を「脳トレ」のために買っているのを見ると、「ゲーム機は家庭に何百万台も普及している。これに学習コンテンツが入るとすると、末恐ろしい...」と思わされるのである。さいわい、子供はゲーム機とお勉強は棲み分けている傾向があるようである。しかし、大人はそうではないだろう。今後の動向に目が離せない。

■「辞書媒体」と「検索スキル」の微妙な関係

Web 2.0 の世界、変容する辞書の媒体を見てくると、辞書学のもう1つの用語が浮かんでくる。それが「辞書検索構造 (reference structure)」という言葉である。辞書そのものをデザインする際に、どのような情報検索の構造を辞書に持たせるか、ということの研究である。

私が現在、「従来型」から急激に変貌する辞書の形を眺めながら感じるのは、辞書媒体が変化することに対応して検索スキルが進化するか、というとそうでもない、ということである。つまりユーザーの検索技術は昔も今もあまり進歩していないのである。ユーザーと辞書の間には常に一定のギャップがあり、辞書情報を的確に抽出するためにはユーザーのスキルがアップするか、辞書のインタフェースがユーザー側に限りなく近づくかしかない(これを専門用語では access structure という)。ところが、辞書編集者の多くはユーザーの検索スキルを理解していないので、どのように access structure を改善したらよいかがわかっていないのである(この問題は Tono (2002) で詳説している)。

そこで、現状は一種の「ねじれ現象」が生じている。辞書媒体は多様化し、「器」は豊富になったが、情報を取り出す方法は逆にわかりにくくなってしまい、紙の辞書でもろくに引きこなせない大方のユーザーは、電子辞書でも単に単語検索を高速にできる、というだけのきわめて限定的な引

き方しかしていない。ほとんどの電子媒体の辞書も、中身が「紙の辞書」を電子化したものなので、ユーザーの検索スキルを意図してゼロから設計するというようなデータの選別や配置ができていないのである。

このような限定的なスキルで電子辞書を使うと、かえって紙媒体よりも視認性も悪く、ぱっと引いて最初の意味をとる、というような安易な辞書引きの癖を増長してしまう可能性がある。「紙のほうが辞書を引く練習になる」と英語教師でいう人が多いのは、必ずしも真理ではないのだが、現状は皮肉なことに電子辞書のスキル訓練が不十分なため、紙のほうがいい、という結果になってしまっているのだ。

■「紙」の大逆転はあるのか?

ここで「従来型の辞書は生き残れるのか?」という最初の問いに立ち返ってみよう。新しい発想の辞書を作る、という視点から行くと、Web 2.0の目指すピア・プロダクションの発想は大いに今後期待が持てる。その際やはり媒体はインターネット上での共同作業になろう。マルチメディアの辞書展開も大いに結構。電子辞書にもますますの進化を待望する。

では「紙」の辞書には未来はないのか? いや、私はそうは思わない。「紙」の辞書は、私は今後も生き続けると思う。それは「紙」の辞書は"organic"だからだ。世界がますますサイバー化し、コンピューターのヴァーチャルな世界が拡大すればするほど、人間は自然のままの状態に回帰したくなるのである。昭和30年代を舞台にした映画がヒットするのはなぜか? 便利になりすぎた時代のちょっと前に、人は人間らしさを、郷愁を感じるからだ。

「紙」の辞書は、「勉強の記録」を刻んでくれるという点でもいい。私はLDOCEを学生時代に愛用していたが、初版を3冊持っている。そのうち最初の2冊は引いていてぼろぼろになり、途中で真ん中から裂けてしまった。しかしそこに記した色あせたマーカー、ちょっとしたメモ、そういった勉強の証が刻まれていくのが、またいいのだ。実は、わからない単語を文脈から推測しながら辞書を引き、そこに載っている定義を理解し、文脈と照合し適切に解釈する、といった英語の語彙に関する「学習経験」をしっかり受け止められる、という意味でも、紙の辞書のほうが電子メディアよりも語彙学習プロセスが深まりやすい、と考えられるのである。

オーガニックな辞書の存在価値が薄れるような愛着のある魅力的な電子辞書、本のように軽く読みやすい液晶パネル、細かくメモ書きのできるパソコン辞書ソフト、そういった「夢のような次世代メディア」が出てくるに違いない。そういうものを大いに期待しつつ、しかし、私は自分のぼろぼろの1冊を手放すことはないのである。

参考文献

Tapscott, Don & Anthony D. Williams (2006) *Wikinomics*. Portfolio. (邦訳『ウィキノミクス』井口耕二訳、日経BP社)

Tono, Yukio (2002) *Research on Dictionary Use in the Context of Foreign Language Learning*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

(東京外国語大学准教授)

『英語青年』2008年4月号予告

《特集》『ロリータ』

新訳が出版されて話題になった、ウラジーミル・ナボコフの『ロリータ』を特集。欧米の大学では授業で使われる「正典」となりながら、映画化されると小児性愛に関わる内容ゆえに上映禁止運動が起こるなど、今なおスキャンダラスな側面も併せ持つ名作である。文化風俗や映像化を含めた、その作品世界の奥深い魅力を探る。最初にパリで出版された『ロリータ』が、アメリカで正式に刊行されてから、今年でちょうど50年になる。執筆＝若島正、中田晶子、毛利久美、皆尾麻弥、山崎まどか、武村知子。

〈新連載〉

● 「英語文章読本」(阿部公彦) 英語をより深く読むための文章読本。

● 「歴史資料で読み直すアメリカ」(仮)(新田啓子)

● 「言語私学」(仮)(トム・ガリー) 日本語にも堪能な著者が、外国語で表現するときに突き当たる壁について語る。

● 「英語小説翻訳講座 グレアム・スウィフトの短篇」(真野泰)

〈特別記事〉

「神経衰弱ぎりぎりの女たち——ジョージ・キューカーのコメディ映画における女性表象」 第1回(小山太一) 『マイ・フェア・レディ』や『スター誕生』などで知られる映画監督ジョージ・キューカーは、特に女優の演出では右に出る者がないと讃えられた。その作品の女性キャラクターを分析。